

集つて回覧雑誌を初めて一つの機運を起さうといふ話を聞くと、私はせめて嘆息のつき処を得たやうに、その第一号の出るのを待ってみた。が、出て来た雑誌を一瞥すると、私は一層望を失つてしまった。心願の国へ来て見た処が、それはやっぱり夢だつたといふ気がしだすと、私は、教室に詰込まれて講義を聴く苦しさに堪へられないで、時折教室から抜けて、商科にゐた従弟の下宿を訪ねて罪のない幼な語りに時を過ごしたり、でなければ、組中で最も文科生らしからぬ只一人出来た友達と、学校の裏手にあつた森の中へ行つて、草の上に寝転びながら身の廻りを罵つた。其処は、人家を僅かに離れた小さな森だつた。が、案外深い感じのする静かな場所だつた。明るい日ざしが落ちてゐる裡に、何処ともなく弛やかな水車の音が聞こえてゐたり、青草が誘ふやうに緑の波を作つてゐて、稀に、赤い着物をきた女の兒が蝶を追つて遊んでゐたりした。そんな可憐なものが眼にとまったりすると、急に凝としてゐるに堪へられないやうな氣持に打たれて、講義を怠けてゐる事も淋しく思ひ返された。さういふ日には、夕暮の風を小寒く電車路で別れる友達と真面目に学校へ出やうなど、約束しても、翌朝顔を合せると、また二人とも其の足で日比谷へ藤を見に行つてゐたりした。兎に角学校は楽しめない日々だつた。

かふいふ中で、私に一番親しく楽しいのは、やはり流觴居の先生の前だつた。なほさらに私は足繁く本包を抱へて浜町へ通つた。

十

学校の帰りにしてはまだ早すぎる時刻、私は浜町へ行く電車の中にある事が珍しくなかつた。いくら行く筈の日になつても、そんな折には、私は、わざと明治座の前で電車を捨てたり、両国で下りたりして、暫くは、多くは初めて踏む名もよく知らない町々の小路などを、何といふではないときめく心を抱いて歩き廻つた。

田舎に生れて、しかも村端れの四方田畑ばかりの家に十七、八の頃までゐて、下町の生活といふものは東京のそればかりでなく郷里の町のそれもまるで知らない私ではあつたが、さうした町のあちこちと漫ろ歩いたのしきは、たゞにもの珍しいといふばかりでもなかつた。割合に早くから荷風氏や万太郎氏やなどの作品をも喜び読んでゐた私は、田舎者の到底不完全にはしろそれでもある都会人よりも多少は深く、さういふ東京の下町の趣きを感じ得るだけの感覚は微かに持つてゐた筈だつた。で、私はあの辺一帶の知つた町知らぬ町の何れとなく親しいものに、本包を抱へた制服姿で憶面もなくほつ、き歩いた。それでゐて、私は、蠣殻町辺の怪しい女の住む町がどの辺か、柳橋よし町など、いふ町が何処かもまるで知らなかつた。さういふものには案外私の心はひかれなかつた。たゞ、住みよささうに磨き古したやうな家並や、地味な彩あいや、小寒い日ざしの中を、漫ろな想ひにつ、まれて歩くといふだけで、私の心は充分だつた。国を一緒に出て来た友人の中には、盛んに女相手の遊びに耽りだしてゐて、私をも頻りにさういふ仲間へ誘ふ連中はあつたが、ついで一度も私はさういふ中に自分を置いた事はなかつた。女の